

大官大寺南方の調査

—第196次

はじめに 大官大寺は藤原京左京九条四坊の南半2町と、十条四坊の4町のあわせて6町を占める寺院で、舒明天皇発願の百済大寺の法灯を受け継いだ官寺である。これまでの調査で主要な伽藍の配置や規模があきらかになっているものの、南門をはじめ、いくつかの堂塔は未確認となっている。一方、大官大寺と県道124号榎原神宮東口停車場飛鳥線（山田道）間の南北約450mの地域に関しては、考古学的な調査は全くおよんでいない。そのため、大官大寺の全容の確認とその南方の様相を解明することを目的として、今年度から調査を開始した。調査は広範な地域を対象とする地下探査と、試掘調査をあわせて実施した。詳細は『紀要 2019』で報告することとし、ここでは概要を記す。

地下探査の概要 探査範囲は南門の推定される地域の南北約100m×東西約100mの約10,000㎡、期間は2018年1月25日と2月14・15日の、のべ3日間で、埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室の協力を得ておこなった。手法は地中レーダー（GPR）を用い、測線は水田面の高低などを考慮して、東西方向を原則とした。ただし作業の都合上、南北方向に設定した場所もある。探査結果については現在分析中であり、次年度に詳細を報告する予定である。

試掘調査の概要 試掘調査地点は藤原京左京十一條四坊東北坪に位置する。調査区は、大官大寺中軸線かつ東四坊坊間路の東側溝が想定される場所がかかる地点に設



図176 第196次調査区全景（東から）

定した。調査面積は南北3m×東西15mの45㎡、期間は3月6日から3月23日までである。

調査地点においては、現在の水田面より約60cmの深さに厚さ20cmの床土があり、その直下の赤褐色土上面において遺構を検出した。検出遺構は柱穴が9基、それ以外の小穴が数基で、東四坊坊間路東側溝は確認できなかった。柱穴はいずれも削平を受けていると考えられ、残存する深さは約40cmである。調査区中央付近では梁行2間、柱間7尺等間で、ほぼ正方位の南北棟南端部分を検出した。また、調査区西部では、柱穴2基を検出し、柱間が7尺で、北でやや西に振れる南北方向の掘立柱塀と考えられる。東四坊坊間路の東側溝については削平されており、今回の遺構検出面では遺存していないと考えられる。調査区の東部では赤褐色土が認められず、東に向かって下がる旧地形を検出した。この旧地形は流路の西岸とみられ、上層は赤褐色土のブロックを含む褐灰色の粘質土が厚く堆積し、下層に粗砂や礫を含む。粘質土中には7世紀後半の土器を含んでおり、その頃にこの旧地形を埋め立て、平坦な地形へと改変していったものとみられる。

（清野陽一）



図175 地中レーダー探査風景